



Title	A Political Romance の問題：Laurence Sterne における《書くこと》のはじまり
Author(s)	坂本, 武
Citation	Osaka Literary Review. 1972, 11, p. 67-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

A Political Romance の問題

—Laurence Sterne における《書くこと》のはじまり

坂 本 武



Laurence Sterne (1713—1768) の *Tristram Shandy* に至る前史は、1759年の一月、*Shandy* 第一巻の執筆直前に発表された諷刺的作品、*A Political Romance* (『権争物語』) の成立過程を探ることによって、概ねその内容を知ることが出来る。但し *A Political Romance* (以下 *Romance* と略記) の世界が *Shandy* の世界の miniature であって、*Romance* の自然な発展が即ち *Shandy* の世界であると云ふ訳ではない。この二作品はそもそも同列に扱ふことが困難なほど、それほど *Shandy* の世界は独自であるからである。然し Laurence Sterne の形成に於てこの *Romance* の果たした役割は決定的に重要である。すべての作家に於て、その処女作が作家の根本的問題の萌芽を持つという意味に於てさうであるやうに。

従来この *Romance* に対して与へられた評価は、Sterne の作家的才能の発見の鍵となったと云ふ点と、この物語の発想を Swift の *A Tale of a Tub* (『桶物語』1704) や Nicolas Boileau の *Le Lutrin* (『見合物語』1674) に借りていることから分るやうに、Sterne のこれら諷刺的作家との近親性という二点において大体なされて来たと云へる。小論の課題はこれらの評価の内実を探ること、そして *Romance* に対してもう一つの評価を与へることである。この後者の問題は Sterne における笑ひに關はることである。

I

Romance を書いてゐる Sterne は云はば未成の作家であつて、未だこの York の教区牧師の頭の中には Shandy Hall の世界は創られてはゐないと考へなくてはならない。 Sterne の仕事は、 Tristram や父 Walter, Uncle Toby, Corporal Trim, Yorick 等々と云つた愛すべき人物達を Shandy Hall に寄び集めて活躍させることではなくて、 York あたりの教区で説教をし、教会における裁判を司ることである。 Sterne は25才でヨークシャーの Sutton-in-the-Forest の教区牧師に任せられ、以後29才で Sutton に近い Stillington の教区牧師を兼任、これと前後して「治安判事」となり、37才の時、「巡回裁判説教」をしたり、38才（1751年）の時「ピカリング・ポックリントン特殊法廷主教代理」（The Commissaryship of the Peculiar Court of Pickering and Pocklington）といった要職に任せられてゐる。 *Shandy* を書くまでの Sterne は教会人としてその地位と地方的名声を次第に上げて、 Archbishop of York を勤めた曾祖父 Richard Sterne (1596?—1683) の威光もあって York 地方の名士として概ねその職務に忠実であったと思はれる。 Sterne の職務内容は受持ちの教区を巡回して説教すること、教会のもう一つの重要な機能であったところの教区内における事件の裁判処理に当ることであった。 Ecclesiastical judge としての Sterne は遺産の証明や、非国教徒の集会許可、床屋に安息日の営業を許すこと、農夫に対する教会拝込金の要求、不法な結婚をした牧師や、教会の補修を怠った地主たちに対する懲戒、などをその勤めとしていたが、中で最も多かったのは女性の不義密通事件であった。⁽¹⁾ 被告は独身のものが多く、それらは、孕んだ子の父親の名を云はぬ不逞の女や、或ひはその父親の名を云ひあてることも出来ぬ、頭の足りない不身持の女——大抵は venereal であった——などであつた。 被告は有罪を宣告されると、公衆の面前で悔い改めのための「告白」をしなければならなかつた。もしこれを拒めば破門宣告（excommunication）を受けた。この「告白」の儀式は今では完全に廃された、恐らくは中世にその源を持つ奇妙な

やり方でなされたとされてゐる。治安判事としての Sterne はその処理した事件約60件の内ただ二件のみが応訴されたと云はれるほど概ね fair な扱い方をした。密通事件の裁判の中の一つのエピソードは Jane Harbottle の事件である。この女は金も無い一種の変質者 (moronic) で、三人目の私生児を生んで告訴され、Sterne はこれに罰金を命じたが、実さいにはこの憐れな女からは何も取り上げなかった。教会がそれを暗黙の内に許してもあたからである。従ってこれは Sterne の humane な個人的感情を物語るエピソードであるが、—この女は *A Sentimental Journey* の中の狂女 Maria のイメージを持たないであろうか—、また当時の教会の情況の一端をも物語つてあると云へる。

王政復古後の Sterne の頃に至る間の教会内部は、地位昇進や告訴もみ消し等のための贈収賄の横行が目にあつたと云はれる。僧職は要するに一つの職業であり、終生の生活保障が或る地位 (例へばこの *Romance* に於て、主人公 Trim として登場させられ、擲揄嘲弄の的にされる Dr. Francis Topham という人物が求めた「代理牧師」等の patent もそれである) によって得られるとなれば、そのための画策を労するのは人情であったと解すべきであろう。そしてそのような ambition のために教会内部での勢力争いが持ち上がつたのも成り行きであったであろう。かうした教会内部が激しい世俗化の波を被つてゆく過程をわれわれは近代化と云ふ言葉でひとまづ了解してをかう。当時の教会内部の、即ち Sterne が職業人として生きてゐた世界の了解事項の多くはわれわれの目にはもはや隠されてしまつてゐるに違ないからである。

教会人にとって昇進は要するに生きがひであった。Sterne もまたこの昇進欲から自由ではあり得なかつた筈である。即ち *Romance* を書くきっかけとなつた教会内の勢力争ひに Sterne が加はつた背景には、Sterne 自身の論争好きの性格の他に、彼の牧師としての地位昇進への政治的動機や野心が働いてゐたものとも見られるのである。Sterne だけが fair な身過をやってゐた訳ではなかつたことについては次のやうな、A. H. Cash の、笑ひの消滅といふ現象とからみ合はせた評言があつて参考になる。

即ち、

Sterne himself eventually decided that he had been unfair. The laughter at lawyers and dignitaries in *Tristram Shandy* stops after Volume IV, which appeared in January 1761, only two years after the *Romance*. In December of that year, when he was preparing to go abroad, Sterne wrote a note to his wife in which he asked her not to republish *A Political Romance* after his death: "I have hung up Dr Topham, in the *Romance*—in a ridiculous light—⁽²⁾ *wch*, upon my Soul I now doubt, whether he deserves it."

然し興味深いことは、Sterne が *Tristram Shandy* の作家となってから（即ち1759年以降）は、教会の方の勤めは代理にまかせて York を離れることが多くなっており、それにつれて宿病の喀血に襲はれるやうにもなってゐることである。Sterne は時に46才であり、遅い作家的出発ではあったが、この時期から彼の生きることと書くこととが本質的な関はりを持ち始めて来たのだと解すべきであらう。現実からの retire と肉体の崩壊とを引替へにして Sterne における＜書くこと＞が始まったのだと云へる。伝記的な事実をさらに云へば、この時期から、かねて不仲だった妻 Elizabeth は精神異常を来たし 正常な夫婦生活を営めなくなり、また母 Agnes と叔父 Jaques (Sterne はこの叔父とも確執があった) が相次いで亡くなるといふことがあり、Sterne の melancholy はいや増し、同時に所謂 Sterne の「恋愛戯遊」flirtation への誘惑もその反動として強まつたであらう。だがこれらの個人的・気質的体験が彼の＜書くこと＞の上に意味を持ち始めるには少しく *Romance* の出現は早すぎたと云へるであらう。

II

Romance が以上に述べたやうな Sterne の永い教会人としての公的経験の中から以外に生れやうが無かったことは確かである。即ち *Romance* は教会内部の地位・権力争いから生まれて来た諷刺的 pamphlet であって、そのきっかけは外在的である。Sterne はこれを外的必然によって書かされたと見た方がよいであらう。以下はその *Romance* 執筆までの現実の経過の大略である。

教会の内紛の発端は *Romance* が出た12年前にさかのぼる。即ち Sterne の大学時代の友人に John Fountayne といふのがをり、1747年「首席司祭」Dean に任命された。その頃からこの司祭と Archbishop of York であった Dr. Hutton といふ人物との間に大聖堂の説教壇の「カギ」のことで対立が起り、Sterne はこの時 Fountayne 司祭の側についた。その二年後の1751年に Sterne は前述した「ピカリング・ポクリントン特殊法廷主教代理」の二つの地位に、Fountayne の配慮によって着くことになる。ところでここに Francis Topham といふ野心的な教会弁護士がいて、以後の「事件」の中心人物となるのである。彼は Sterne が「代理牧師」の地位を得たことについて、Fountayne 司祭はじつは自分 (Topham) にそれらを約束してゐたのにその約束を裏切ったといふ噂を流す。二、三ヶ月後ある酒商の York 駐在に因んで晩餐会が開かれ、その場に Fountayne の一派も Dr. Topham も Sterne も、その他参事会員達も出席した。この席上 Fountayne は Topham を「吊るしあげ」にし、確かに約束はしたが、その後ある人のために件の「司教代理」の地位は却下したのであり、又「代理権」を与へるのは私の義務ではないと釈明、Topham の云ひ分をくつがへしてやり込め、‘Scoundrel’ 呼ばはりさへするといふ次第になった。Sterne は未だこの時はこの騒ぎを面白がって眺めてゐる傍観者にすぎない。事件は Dean の方が Topham を黙らせて一応ケリがつき、以後の七、八年間 York の宗教界には事件らしい事件はない。Sterne は Sutton-in-the-Forest の牧師館で比較的平穏な生活をしたと思はれる。一方 Topham の方はこの恨みを忘れるることはなかったと思はれる。

以上の事件が *Romance* の中では「半ズボン」‘An old-cast-Pair-of-black-Plush-Breeches’ (つまり the Commissaryship of the Peculiar Court of Pickering & Pocklington を指す) をめぐる争ひとして扱はれてゐるものである。

さて Sterne に pamphlet を書かせた事件は次のやうな次第による。即ち前の事件の六年後1757年に Archbishop of York が Dr. Hutton から

A Political Romance の問題

Dr. Gilbert と云ふ人物に代ると、Topham が再び活躍を始め、この新しい Archbishop に取り入って世話をやいたり、Dean Fountayne の一派は queer な連中だから気をつけるやうに、などとおせっかいを云ふ。これはつまり Topham に下心があったので、彼は自分の息子のために「財務裁判所及び遺言事件裁判所の代理」(the Commissary of the Exchequer & Prerogative Courts) の patents を取ってをかうとしたのである。気の弱い Dr. Gilbert は翌1758年 Topham の申し出を受け、つい承知してしまふが、あとでこのことを疑いはじめる。Romance ではこの patent は「外套」‘Watch-Coat’として、Dr. Gilbert は ‘the parson’ として、前の Dr. Hutton の ‘the late parson’ とは区別されて登場するものである。この新しい大司教は、この patent は Dean と参事会の同意無しには与へられないのではないかと考へ、Topham の申し出の問題について明確にするため Dean と Topham その他の人々を呼んで協議をする。その結果 Topham が申し出たやうに件の patent の世襲は許されず、一代限りとすることが決定される。この前に Topham は旧敵の Dean に働きかけて今度の patent のことはよろしく頼むといったことを恥知らずにも云つてゐるが Fountayne は冷たくこれを断はつてある。これで Topham は息子のための patent が取れなくなった訳で、七年前の恨みごとも重なつてつひにこの野心家は pamphlet 合戦の口火を切ることになる。この論争の中で出された pamphlets は三つである。それらの題名及び出版期日は次のやうである。 ((1)～(3)までの時間的開きが少いことに注意。)

- (1) Dr. Francis Topham のもの : *A LETTER Address'd to the Reverend the DEAN of YORK ; In which is given A full Detail of some very extraordinary Behaviour of his. in relation to his Denial of a Promise made by him to Dr. TOPHAM.*

(December 11, 1758)

- (2) Dr. John Fountayne のもの : *An ANSWER To A LETTER Address'd to the DEAN of YORK, In the NAME of Dr. TOPHAM.*

(December 24, 1758)

(3) Dr. Topham のもの (no sign) : *A REPLY TO THE ANSWER TO A LETTER Lately addressed to the DEAN OF YORK.*

(December 26, 1758)

この最後の Topham の pamphlet の中で、(2)の ‘nerveless prose’ は ‘the Child and Offspring of many Parents’ であると、その「全然なってゐない文章」が合作であることをすっぱぬいて、その「親」の一人に Sterne の名を挙げたことから Sterne も黙ってをれなくなり、Topham に対する反駁の pamphlet を書くことになったのである。他ならぬそれが、年が明けた1月20日に出されたこの *A Political Romance, Addressed To _____, Esq; of York. To which is subjoined a KEY.* (January 20, 1759) である。このタイトルの下には次のような epigraph が付されてゐる。

“Ridiculum acri / Fortius et melius magnas plerumque secat res.” (笑ひは大事を円満に解決するに当つて諷刺の辛辣なるに優る)⁽⁴⁾

この Horace の言葉が Sterne の＜書くこと＞の最初の姿勢を云はば決定づけたと云つてよい。Romance を書くに至つた動機は Topham 攻撃と云ふことにあつたが、彼はいつの間にか satire よりは burlesque に、fact よりは fiction に、つまり、面白おかしく語るその語りといふこと自体に関心を向けてゐた。例へば、後で一言するように Romance の中の “The key” の部分ではもはや相手攻撃の諷刺の意図はのりこへられてゐて、Shandy の基調である登場人物達の「意見」による extravaganza と humour の表出に Sterne の＜書くこと＞は行き当つてゐると云へるからである。

Sterne の関心はそのやうな方向に向いてゐたが、Romance の諷刺の効果は予想以上に上がつて、その諷刺がききすぎたために、相手の Topham には、もしこれを公表しないと約束すれば自分のこれ迄の云ひ分はとり消す、と云はせ、又一方教会の当局方にも、この公表によって教会内部の腐敗の印象を世間に与へるという危惧を抱かせることになり、当局から出版

を見合はせるやう説得を受ける。Sterne は結局これを受入れ、五百部ほど刷られて York の本屋に出回ってゐた分も印刷屋の残部も回収されてつひに焚書の憂き目を見ることになるが、このうち四部だけはからうじて残り、Sterne の死後これは *The History of a Watch-Coat* (『夜番外套物語』) と改題されて出版されることになる。またこの焚書でもって論争にピリオドがうたれたのである。

ところで Sterne は自分の書き物が与へた効果の大きさに自信を得、これ以後彼の血の中には<書くこと>の悪魔が入り込んでしまふのである。つまり、驚くべきことに、Sterne は *Romance* の事件の直後、1759年の一月の末の十日間の間にもう *Tristram Shandy* の執筆にとりかかってをり、六月には第二巻の草稿を仕上げてゐる。この *Shandy* へ至る前史を飾る最後の十日間のことについてわれわれは、その極めて短時日の間に Sterne の内部に急激な集中力が生じて *Shandy* の世界が image を結んだのであらうと推測することが出来るだけである。或ひは、1759年1月の終りの10日間に突如 Laurence Sterne に於て<書くこと>が真に——つまり彼の本的な生と書くという行為が抜きさしならぬ関はり方をもつて——始まり、その<書くこと>が *Tristram Shandy* その他の人物とその周りの *Shandy Hall* の世界に遭遇したのだと云へやうか。この十日間こそは Sterne が未成の作家から *Shandy* の作家へと変身する時期であって、*Romance* はそのさいの強い外的うながしとなり、そして結論を先に云へば、Horace の言葉に見られる<笑ひ>の精神の、書く行為の中での発見こそがそのさいの内的うながしとなったのではあるまいか。

III

以上見たのは *Romance* の成立過程である。では、紙数が限られてゐるが、次にこの作品の形式と意味に関して若干の考察を加へたい。

Romance の全体の構成は次の五つの部分から成つてゐる。即ち、

- (1) “*A Political Romance*”
- (2) “*Postscript*”

(3) "The Key"

(4) "To ———, Esq; of York" (5) "To Dr. Topham" } (Jan. 20, 1759)

といふ順序である。主要な眼目は勿論(1)の「ロマンス」に置かれてゐる。

(4)(5)は1月20日印刷屋に渡す直前に書いた実際の手紙であり、(4)は印刷屋の Caesar Ward 宛、(5)は見る通り Topham 宛である。(1)(2)も又書簡の形式を取つてをり、(3)だけが客観描写による story である。(1)(2)でこれまで述べて来た教会内部での争いを寓意形式で諷刺してゐる。ここでは現実の事柄から外れて寓意化された人物・物は描かれてゐない。つまりそれらの間には明確な対応が出来てゐる。いまそれを示すと以下のやうになる。上段は実際の人々、下段は *Romance* の中の人物である。現実の人間たちが寓意の世界では、場所までも含めて、すべて degrade されてゐることに注意すべきである。

Dr. Francis Topham Dr. John Fountayne
(Church lawyer) (the Dean of York)



※ Sterne

(the Archbishop of York)

{ Dr. Hutton—1751.

Dr. John Gilbert—1757.

• place; the Chapter House and the Minster Yard, York

Trim
(Sexton & Dog-Whipper)John
(Parish-Clerk)※ Lorry Slim
an unlucky Wight{ the late parson
the parson

• place; a country parish

この *Romance* が degradation による allegory である例はこの他にも、例へば Topham が息子のために狙った patent の事件の場合、'patent'→'Watch Coat'、息子 Edward→トリムの妻、'the Commissary of the Exchequer and Prerogative Courts'→ペチコートとジャケットと云つた図式にも見られる。

(3)は York のある小さな政治クラブで(1)の「ロマンス」が読まれ、そこにゐる種々の階層の者たちがこれについて得手勝手な自由な連想のままに各々の opinions を披露してゐる場面の描写であり、その humorous な extravaganza 風の ‘discommunication’ の有様はすでに充分に *Shandy* の世界を予想させるものとして重要であらう。しかしこの描写の主体は明示されてはゐない。*Shandy* における Tristram が不在であると云った風である。見方を変へれば(1)に於て＜書く行為＞は「他者攻撃用 pamphlet」といふ前提条件を与へられてゐる。ところが(3)に於て、そのような条件はもはや考へられてはゐず、＜書く行為＞は自由な展開の場を虚構の中に獲得してゐると云ふことが出来る。

Romance の構成に於ては統一視点はなく、形式も自由であって、実際の手紙を作品として組み入れるといった破格を行つてゐる。而も Sterne は自らこれを一コの作品として見なすことを確認してゐた、それも ‘curious Pattern’ のものとして。この破格な構成を充分に意識してゐる裏には Sterne の道化ぶりをうかがふことが出来るのではないか。そこには明らかに諷刺の意図よりは笑ひの意図があるであらう。

形式の問題をまとめると、題としてつけた “A Political Romance” はもはや中世風冒險譚のニュアンスとは無縁であって、“The Key”で使はれてゐる意味を考へると、それは ‘allegory’ に近いと考へられる。しかし allegory を、教訓的意味を本来的に持つた宗教・道徳的寓喩として考へると、そのジャンルからこの *Romance* は少し外れる。この作品の基調は笑ひの意図を持たせられたその語り口にあって、教化的と云ふよりは道化的（自意識の舞踏としての道化ぶりが発展してゆくのは *Shandy, Journey* の方であることは勿論のこととして）であるからである。しかし *Romance* における笑ひは調和を意図されたものではなく、それは他者攻撃用の武器としてむしろ意図されてゐる。笑ひが諷刺の武器として使はれてゐるのである。全体として見れば *Romance* の意図はやはり諷刺にあるのであって、しかしその意図が humour の表出によって和らげられてしまふといふ点にこの作品の特質があるのである。

Romance における諷刺の方法は前述した如く degradation の方法であるが、結局このことは、great に見へるものがじつは small なものに過ぎないと云ふ、世界を相対的に見る Sterne の認識を示すものであり、このことと彼の humour の精神及び philosophy of laughter とは無縁ではない。Sterne の諷刺は Swift 流に弾劾的で絶望的・破壊的ではなくて、その背後には ‘smiling generosity’⁽⁷⁾ が隠されてゐる。それが *Romance* のやうな他者攻撃用の pamphlet の場合でも、そのどこかに顔を出すのである。Sterne にとって諷刺とは comedy であって、彼はこの世界の trifles な、absurd なもの——Trim が懸命に求めた地位も又さうである——によつて人間が如何に誤りやすいかを絶望せずに見てゐる。はじめの引用(註2)にあげた箇所の最後の手紙の文句は、彼が1761年大喀血をして転地療養のため大陸旅行を決意し、国外で死ぬ事態を考へて妻に書いた遺書の一節であるが、引用部分の文脈とは切り離して考へて見れば、要するに彼は常に云はば死者の側に立つて物を見るやうになつてゐたのであるまいか。そしてさらに *Romance* の扉に付された Horace の言葉——それはそのまま *Tristram Shandy* の精神である——はこのことの manifest として読めるのではあるまいか。

Sterne における〈書くこと〉がこの epigraph に見られる精神を獲得したこと（つまり笑ひの精神の発見といふこと）が、結局この *Romance* の意味するところである。この時笑ひとは、彼が *Shandy* を書いてゆく場合の内的うながしであり、彼の方法であった。〈書くこと〉が自己発見につながる行為であることを、1758年末から1759年初めにかけてのわづか一ヶ月にも満たぬ間に、Sterne は示したのである。

〔註〕

本稿は大阪大学英文学会第四回大会（昭46年11月7日）における研究発表草稿を基にしたが殆んど全部書き直したものである。

Text: *A SENTIMENTAL JOURNEY Through France and Italy to which are added THE JOURNAL TO ELIZA and A POLITICAL ROMANCE*. Ed. by Ian Jack (Oxford U. P., 1968)

A Political Romance の問題

伝記的事項は W. L. Cross; *The Life and Times of Laurence Sterne* (New York/Russel & Russel, 1967) に拠った。

- (1) Arthur H. Cash, "Sterne as a Judge in the Spiritual Courts: The Groundwork of *A Political Romance*", in *English Writers of the Eighteenth Century*, ed. by John H. Middendorf (Columbia U. P., 1971) p.19 et. al.
- (2) Ibid. p.25. なお引用の手紙は *Letters of Laurence Sterne*, ed. by L. P. Curtis (Oxford, 1965), p.147. 参照。
- (3) *A Political Romance*, p.205. 'John's 'Desk' として暗示。
- (4) Horace; *Satires*, I. X. 14—15. (Loeb Classical Library) p.116. = 'Jesting oft cuts hard knots more forcefully and effectively than gravity'.
- (5) Lodwick Hartley; *Laurene Sterne*, a biographical essay. (Chapel Hill, 1968) p.72.
'From now on the demon of writing was to be in his blood.'
- (6) "Letter To? Caesar Ward," L. P. Curtis, op. cit., p.68.
- (7) Henri Fluchére; *Laurence Sterne: From Tristram to Yorick*, (Oxford, 1965) p.206.